

# ロマン主義音楽の背景とシューベルト

八 代 秀 夫

1978年はシューベルト Franz Peter Schubert 没後 150年目にあたる。その 31年前、1947年（昭和 22 年）の12月 2 日、日比谷公会堂で「シューベルト生誕 150 年記念演奏会」が朝日新聞社の主催で行われた。曲目はロザムンデ序曲、未完成交響曲、変イ長調ミサ曲であり、出演は東京音楽学校（東京芸大）管弦楽部、指揮渡辺暁男、独唱者は石田栗、佐々木成子、柴田睦陸、中山悌一などであった。

その様子は月刊「音楽」アポロ出版社1948年 1 月号に評がのっている。それによると「今年シューベルト記念音楽会がいろいろ催されたが、この演奏会は中でも最も素晴らしい成功をおさめた。」と音楽批評家の野呂信次郎が書いている。この音楽会に参加した一人としてその時のことをふり返ってみると東京だけでも 9 月にはオーケストラが14回、オペラ15回をふくむ他の演奏会が61回、10月には 107 回もの各種のコンサートが行われ、如何に人々の音楽を求める声が強かったかを現わしている。

当時のヨーロッパの楽壇の事情では1945年（昭和20年）春にドイツがイタリアにつづいて連合国側に降伏し、枢軸国で戦争状態が続いているのは日本だけであった。そのなかですでにローマでは戦後初めての音楽祭が行われ、戦時中に作曲されていた「平和のためのミサ曲」、カセルラ Alfred Casella が初演された<sup>1</sup>。

夏には不完全な形ながら 占領軍によって 曲りなりにも オーストリアでザルツブルク Salzburg 音楽祭が開かれた。翌年ドイツでは戦後第一回の国際音楽祭がダルムシュタット Darmstadt で行われ、スイスではシャッフハウゼン Schaffhausen で第一回国際バッハ祭が行われた。次の1947年にはエジンバラ、ロンドン、ストラスブール、ウィーンとヨーロッパ各国で戦前を上回る勢いで音楽祭が行われ始めたが有名なドイツ・バッハ協会の存否は不明であり、又ナチに協力したワグナーの遺族達のためにバイロイト Bayreuth の音楽祭は何時開かれるのかわからない状況であった。戦後バイロイトが再開されるのは1951年（昭和26年）まで待たなければならない。

この頃、敗戦後すぐの日本ではシューベルトに関する国際音楽祭など望めるわけもなく、年に何回かのコンサートと音楽雑誌に幾つかの特集がのった位である。月刊「音楽」1947年 7 ～ 8 月合併号には「ゲーテとシューベルト」属啓成、「シューベルトと日本」宅孝二、そして「音楽縦横談」近衛秀磨にもシューベルトの交響曲についてふれている。又「ミュージック」5 月号には「シューベルトとフレリッヒ家の四人の姉妹」属啓成、翌年 2 月号には「シューベルトと英文学」二見孝平、「フィルハーモニー」前年12月号には「シューベルトとその時代」荏原次郎などシューベルトに関する論文や文献を見ることが出来る。演奏では前記の他に

「シューベルト歌曲祭」中山悌一と三宅春恵，「シューベルト演奏会」日響室内楽団，「シューベルト歌曲講習会」木下保その他沢山の催しが行われた。

31年後の1978年にはシューベルト没後 150 年記念のコンサートが全国各地で行われたが，東京の音楽会そのものの数は昔とくらべても大して増えず，同じ時期の11月の演奏会は31年前とほぼ同じ 120 回であり，そのうちでシューベルト特集とも云えるものは 4 回だけである。

しかし現在の日本の音楽水準は当時と比べると質も内容も極めて高く一概に比較は出来ないが，今日のように国際交流が激しい中で毎年のように一人の作曲者にターゲットをしばった演奏会が行われている現象は注目に値する。

日本人が共感を得やすいと云われるリリズムを利用する商業主義は確実にそれらに関係するレコードの売行きを伸ばし，又興業面でもそれによるリスクを解消することが出来る。ところがヨーロッパでは或る一定期間だけをヘンデル祭とかバイロイト祭典劇場のような形で開催したとしても年間を通じて記念演奏会のような形で開かれると云うケースは殆どない位極めて珍らしい。その理由の一つとして日本では特定の作曲家個人に集中した形で色々な催しが行われることが多いが，ヨーロッパやアメリカでは作曲家の属している時代や主義に焦点があてられ，背景の持つ認識の共通性が極めて強いと考えられるからである。数多いこれらの作曲家の中でも全く不自由であった戦後すぐの日本の社会で，多くの日本人に求められ又印象的であったシューベルトについて文芸思潮の流れの中の音楽の時代背景を考えてみたい。

さて本題のロマン主義について一般にロマンと云われるものは空想的，非現実性の意味にもかわり合ってくる独立した内面の世界である。これらは決して吾々が現実からの逃避ではなく，外界からの刺激にもかかわらず，基本的な精神の運動型態が感情ばかりではなく知性も心の動きにつれ，その心の傾きが集中的，かつ自覚的に現われたのがロマン主義運動と云われている。

しかしこの様な運動の型態も芸術のジャンルでは色々と異った現われ方をしてくる。文学では1789年7月14日のバスチーユ襲げきによるフランス革命への熱狂と新しい観念論からの古典主義又はアンシャン・レージューム（旧制度）への攻撃と反抗，民族的伝統の重視。つまり19世紀中頃のコロール・ロカール（地方色）から自然描写～科学的根拠による写実主義～そして自然主義へと移行している。

19世紀の文学はスタール夫人とシャトー・ブリアンで始まるとされているがスタール夫人の「ドイツ論」の中でクラシックに対比してロマンチックと云う言葉が文学史的意味で始めて使われたと云われる。そしてシャトー・ブリアンの「回想」は理性によってではなく感性によって神を信ずる 前期ロマン派文学の代表作となっている（「フランス文学案内」渡辺一夫他著 岩波文庫 P. 125～127より）。

美術では造型面で堅く 冷やかな 古典主義に対する反動としてのジェリコやドラクロワの作品に於ける現われ方。他にコロー，ミレー，ドーミエ，クールベなどバルビゾン派 Ecole de Barbizon の風景画家による活躍はロマン主義・写実主義の両思潮にまたがって19世紀の前半

に大きな足跡を残した。

このような時代の流れに対して音楽史上のロマン的と云う言葉はやっと19世紀始めに文学から移植して使われるようになったが、音楽史の時代概念としてのロマン派時代と云うのは他の芸術分野と違い必ずしも直前の古典派音楽に対する反動としては片付けることが出来ない要素をもっている。むしろルネッサンスを通じてつちかわれてきた人間の精神生活の高まりは急速に発展してきた17、8世紀のバロック音楽やロココ音楽の中にも幻想や描写を音楽に託そうとする傾向があり又古典派とは云え感情豊かなモーツァルトの音楽の世界にはすでにロマン主義作曲家に近いものを感じさせる。

例えばモーツァルトのピアノのための小品「ロンド」イ短調、K. 511. は1787年3月にウィーンで作曲されたが単純な曲の中に効果的に半音階を使ったり、さびしさがあふれ絶えず語りかける趣きは聴く人の心をこの曲にひきづりこんでしまう。

この様な自己の感情生活が創作の出発点になることは極めてロマン主義的発想であり、その次の世代の作曲家達の多くが音楽上の形式に頼らず独特の和声、リズム・音色を追求して行く方向に何等かの影響を与えている。

古典派の一方の巨匠と云われるベートーベンも形式こそ古典的傾向に従ってはいるが、それだけでは彼のもつ精神的内容を包みきれず、むしろ近世に於ける人間性開放と同様な意欲が作品上かつてない程の音楽上の緊張感をもたらしている。ベートーベンと同時代のホフマン Ernst Theodor Amadeus Hoffmann にとってベートーベンはずでにロマン的であると見られていた。

「ベートーベンの音楽には恐れ、畏怖、恐怖、苦悩の桿を動かしロマン主義の本質である無限の憧れを目覚めさせる。それゆえ彼は完全なロマン主義的作曲家である。」と述べている。

ベートーベンの中期から後期にかけての形式からの離脱と云う面はロマン主義的傾向とも見られるが、主題設定とその対照性、或は展開性の原理の中に見られる古展の要素は必ずしもそれらにどちらかと云えば無関心を装っているロマン主義的作曲家と同一視は出来ない。

野村良雄氏によると、ベートーベンの作品の区分を初期の遊戯的、社交的なものから、中期の倫理的、人間的なものを経て、後期の宗教的、神秘思想的に致ったと考え、キェルケゴール Kier-ke-gaard の美的一道德的一宗教的という人生の三段階に一致すると述べている（『世界史のなかの音楽』野村良雄著 新時代社）。

中期のラズモフスキー弦楽四重奏曲や「フィデリオ」のような倫理的世界観に生きてきた彼が、晩年死にのぞんで司祭が帰ったあと、「喜劇は終わった。」と叫んだことは彼の中にあるマニ教的霊肉の二元的現われなのか、或は人生に対する単なるアイロニーであるのかわからないが、より人間的なロマンチストであったのかも知れない。

しかし初期ロマン派の音楽家達も機能と声<sup>2</sup>を原理とし、特に古典派から区別される程の新様式を確立したわけではなく、同じ素材や形式的要素に密着しながらそれらを発展していったのにすぎない。その特徴を幾つかあげると、より柔軟で色彩的メロディ、新しい和音や進行の研究、半音階の導入による転調 modulation のより一層の自由さ、リズムに於ける複合拍子

(5, 6, 7, 9, 11拍子)などの日常の使用、形式では歌曲やピアノ曲の中で小形式がある一方極めて長いものが書かれている。管弦楽法 Orchestration も可成り長い時期にわたり新しい楽器が加えられ、木管、金管共に大巾な改良が行われ、多彩な音色が追求されるようになってきた。

このように音楽史上のロマン派の始まりは、18世紀の末から19世紀の始めにかけて現われた文芸史上のロマン主義とくらべると大変あいまいである。

初期ロマン派の文学者シュレーゲル August Wilhelm Schlegel は1767年、弟のフリードリッヒ Friedrich とノバリス Novalis は1773年、シュリング Schelling は1775年と続く中で古典派の巨匠ベートーベンが同時代の1770年に生れている。それに対してロマン派の音楽史上の始まりとされるウェーバー Karl von Weber は1786年、シューベルトに到ってはもう10年あとの1797年生れである。したがって彼らが活躍を始め最盛期になるのは19世紀も可成り経ってからの1820年頃からである。

ハウザー Arnold Hauser の「音楽に於けるロマン主義」によると「音楽は19世紀の終りまで一貫してロマン主義的であった。他の芸術のジャンルより一層徹底的にロマン主義であった」(「芸術の歴史」高橋義孝訳 平凡社)。

ホフマンは「音楽はただ一つの真の意味に於けるロマン的芸術である」

ヘルドリッヒ Hölderlin は「音楽にくらべれば言葉は貧しくて表情に乏しい」

ニーチェ Friedrich Nitzche は音楽の精神からの悲劇を説き<sup>3</sup> ワグナー Richard Wagner は「言葉の終る所から音楽は始まる」と見た。

そしてトーマス・マンは「かつて自分はワグナーの音楽によって初めて芸術の意味を悟るようになった」とまで云い切っている(前出「芸術の歴史」)。

ここまで書くと音楽は多くの文芸作家から極めてエモーショナルな、そして情緒的な一種の憧憬として書き記される場合が可成りあるような気がする。しかもそこには他の芸術作品には見られない創作作品そのものの評価だけではなく、ロマン派の時代となると今迄不可分であった作曲家と演奏家が各々独立をし、自らの芸術を主張し合うようになってきた。

古典音楽の土壌となったおおらかな生活は、1815年頃にはフランスにかもし出された第三階級の爆発的な革命のもりあがりによって乱された。その為に起ったナポレオンによる侵略戦争には国内に於てまだ桃源の夢をむさぼっていたウィーンを震撼させた。

政治的不安と経済的変動のため社会が不安定化し、それに続くナポレオンの決定的敗北はメッテルニッヒによる反動政治となりウィーンだけではなく全ヨーロッパがまた封建的な重圧におびえてきた。

音楽もかつて若いベートーベンがその力を存分に発揮した時のように、外界にむけて生きいきとした社会の動きを追求してゆくのと違い、自分の内面に深くとじこもり、身近に起る細かい感情や感覚の断片を探る方向になってきた。

一般の社会情勢も古典音楽が昔のような豊かさをもって受け入れられるような条件は殆どなくなり、それに代るべきものとして小曲指向となり、歌曲では小品に人気が集ってくる。それがリート Lied である。シューベルトが作曲家として世に出たのは正にこの様な時代である。

シューベルトが1797年ウィーンの郊外リヒテンタール Liechtental に生れ、1808年に王室首都神学校 Stadtkonvikt に入学を許されるのだが、ここはオーストリア貴族子弟の為に1803年に設立され寄宿制をとり、小学校と8年制高校の課程があった。

貴族子弟の他に官廷礼拝堂 Hof Kapelle での少年歌手の資格を得たものも、やはりこの学寮に入り無料で小学校と高校下級の授業が受けられた。試験は欠員のあるごとに行われ1808年9月にはソプラノ（ボーイ）2名とアルト1名が採用された。シューベルトはソプラノの試験に通り入寮を許された。彼が11才のときである。これが後年の「ウィーン少年合唱団」となる。

その間にウィーンではハイドンの天地創造や四季などのオラトリオ、ベートーベンの月光・熱情、ワルトシュタインのソナタ、そしてこの年は第五交響曲<sup>4</sup>が作曲された。

シューベルトが神学校在学中にメンデルスゾーン、ショパン、シューマン、リストと偉大なロマン派の作曲家達が次々と生れてきた。1810年13才の時に「四手用ピアノ幻想曲」を始めて作曲した。1812年5月には母親が死に、9月の成績表には「変声した」と書かれている。15才の時である。成績優秀で奨学金を受けていた彼は変声したにもかかわらず学校に残れるのに止めてしまい、翌年に改めてウィーン市師範学校 Vienna Akademische Gymnasium に入った。これについてヒンダース、クッチャーは「これは徴兵をまぬかれるため」と書いている。この頃オーストリアではナポレオンのために男子は17才になると兵役に服さねばならなかったからである。しかし学校の教師だけは兵役免除であった。彼は17才の8月19日に助教員の免状を得て父親の学校に勤めることが出来た。この年に歌曲だけでも127曲が書れた。

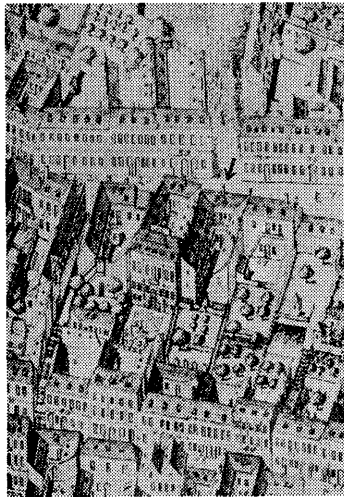


fig. 1 シューベルトの生家 矢印のところ42番地  
1776年のフーバーの版画 From Schubert  
byotto Erich Deutsch Publishers Dent  
and Sons Ltd.



fig. 2 生家の中庭にある鱗のふん水 大理石  
1911年 ミュラー作 (fig. 1 と同じ)

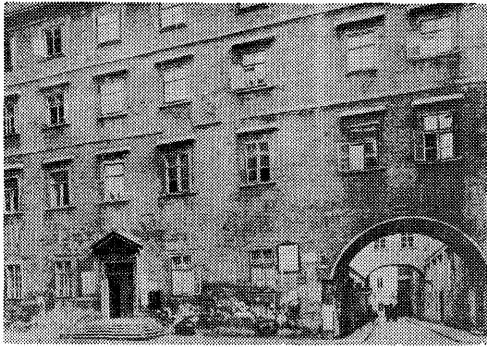


fig. 3 ウィーンの王室首都神学校  
1808~13年迄存学 (fig. 1 と同じ)

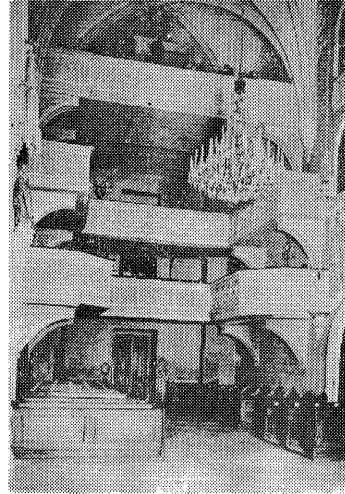


fig. 4 ウィーン宮廷礼拝堂内部 (fig. 1 と同じ)

古典派時代には数少なかった歌曲のジャンルで彼が早くからロマン主義的要素を示したのに対し器楽の面では必ずしもそう許りではなく、例えば1815年18才の時作られた交響曲第3番ニ長調はそれ迄のハイドン、モーツァルト、ベートーベンの影響の強い習作的なものである。初演されたのは彼の死後可成り経った1881年2月にロンドンで行われ出版は1884年ブライトコフでされている。しかし歌曲ではこの年に野ばらや魔王を含む114曲が作曲されている。シューベルトが彼の歌曲で片思いに心酔していたゲーテが19世紀前半のウィーン体制の反動時代にエッケルマンとの会話としてしばしばとりあげられる「古典的なものは健全でありロマン的なものは病的である」というくだりはパウル・ベッカー Paul Becker の音楽史では「ゲーテは古典的なものとロマン的なものを様式上では区別していない。彼はロマン主義の特徴として病的な要素が強調されるのを感じそれを指摘したのである。しかし19世紀のあらゆる芸術はこの病的要素（ペトロギッシュ）と異常な主観の強調とに特別な刺激を見出していたのである」と書いている。

しかしゲーテ自身の中にも多いにこのペトロギッシュな要素があったのではなかろうか。私はドイツ滞在中の或る日ゲーテの「若きウェルテルのなやみ」の舞台となったヴェッツラー Wetzlar の町を訪れた。現在でも人口3万人たらずのこの田舎町はラインの支流であるラーン河 Lahn に沿って居る。あまりきれいとは云えない流れの中に浮んでいる白鳥とアーチ型の大きな石造りの橋を通して丘の上には大聖堂の変形した塔がそびえている。うろこ瓦を使ったこの地方の独特の灰色の屋根が重なり合って現代を忘れさせてくれる。

横丁と云う程のせまい道路に面した市役所に向い合った一軒の古びた宿屋に泊った。木骨としっくい壁の外観は木組柱を現わしたファッファベルクと云う頑丈な造作であり、室内の天井ははりも又びっくりする程太く黒光りしてがんじょうである。

昔風の手すりや飾りつけのある階段は数百年来全くそのままであり、フランクフルトで立寄

ったゲーテの生家の方がずっと新しく感じられる位であった。陶器製の巨大なストーブ迄何もかもゲーテの家にあったようなもの許りである。その辺を見回すと未だ彼が町の裁判所に通っているような気がする。翌日訪れたゲーテの下宿やロッテの家、正式にはシャルロッテの両親の家で見た当時の家具や手紙、肖像画などウィーンで後年シューベルトに会うゲーテの青春時代を知るのには充分であった。

激動のロマンチズムの時代に生きたこの偉大なる詩人の心の中にはどの様な彼自身との闘いがあったのだろうか。私はそれらの創作活動に於ける内面的要因が19世紀に到ってやっと芸術の公開と云う社会性及び実用主義が芝居や音楽には劇場とか演奏会、世俗世界に於ける普遍性を与えることになった意義を軽視してはならないと思う。

芸術史上でビーダーマイヤー Biedermeier と云われる時代はロココ時代に続くアンピエーア時代のボナパルト英雄視の反動として貞節素朴を主体とした時代概念だがこれは又シューベルト時代とも呼ばれている。

人生の詩を美しい旋律で唄ったシューベルトの歌曲も友人だけの拍手に迎えらるる時期が長かった。彼のような大衆的（庶民的）作曲家が大衆の層と広く結びつくことが出来なかったのは19世紀前半に於ても保守的なウィーンでは市民階級の成長が遅れていたからにすぎない。

「私の伴奏でフォークル Vogl<sup>5</sup> が唄った時 その一体となったやり方や様式は未曾有のものだった」とシューベルトは云っている。この二人は歌曲演奏をそれまでにないほど芸術的に高度なものにしている。そしてリート Lied の演奏ほどロマン的、個人的でかつ人間的なものはない。

ドイツ歌曲の歴史がシューベルトに始まるとされているがこれは又詩と音楽が真に一体となってもたもたす全く新しい世界である。

詩を読むことにより得られるイメージは器楽作品のように作曲家だけのものではなく、あくまでも詩人との共有物である。詩のもつ文学的イメージを音楽を通じてさらに深めてゆくことこそシューベルトの本質であり、又未完成的交響曲のように限りなき前進を約束する彼のロマンチズムの証しである。

そして未完成が作られた7年あとの1828年3月、つまり彼の死の9ヶ月前に演奏時間46分にも及ぶハ長調の大交響曲を殆ど下書きもなしに書きおろした。シューベルトの死後10年たってメンデルスゾーンの指揮でライプチヒのゲバントハウス管弦楽団によって初演されたこの第七交響曲はこの曲の発見者シューマンによって次のように書かれている。「このすべてのものの上にわれわれがすでに彼の作品のいずれにおいてもみとめるところのロマンチズムの精神があふれている。それはたとえばジャン・パウルの四巻の長篇小説のように、終ることを知らない。」



fig. 5 ラーン河よりヴェッツラーの町をのぞむ。  
著者撮影

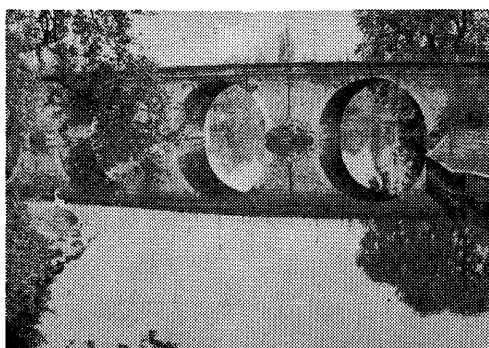


fig. 6 ラーン河に水影をおとしているヴェッツラーの橋。著者撮影

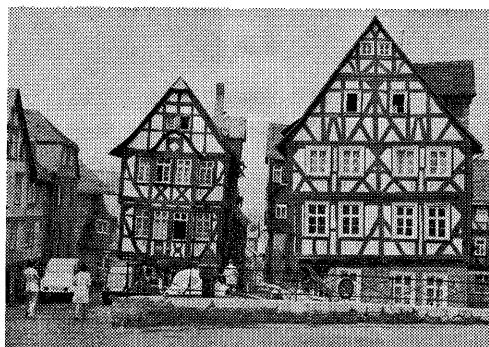


fig. 7 ヴェッツラーの古い木骨の家。著者撮影



fig. 8 右手の家は若き法律家ゲーテの住んでいた  
ヴェッツラーの家。著者撮影

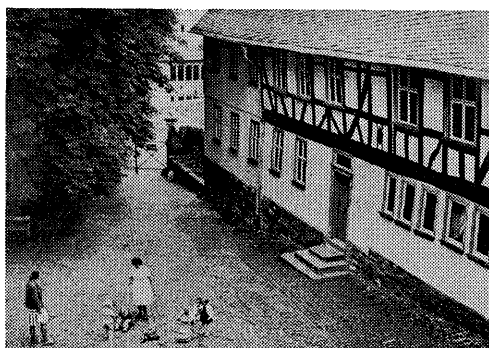


fig. 9 シャルロッテの家 ヴェッツラー  
著者撮影



fig. 10 未完成交響曲の表紙とシューベルトの自筆  
サイン。1822年 (fig. 1 と同じ)





fig. 11 歌手フォグエルとピアノの伴奏をするシューベルト。(fig. 1 と同じ)

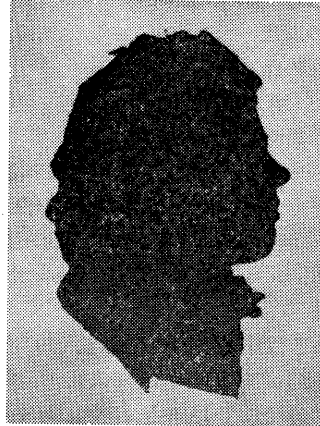


fig. 12 1817年20才のシューベルトのシルエット。(fig. 1 と同じ)



fig. 13 1826年26才のシューベルト。(fig. 1 と同じ)

#### 注

1. このニュースを当時陸軍航空隊鈴鹿飛行場にいた私はアメリカ軍のサイパンからのラジオ放送を傍受して知った。
2. 機能理論 Funktion theorie による Tonica, Dominant, Subdominant の三つの機能の組合せからの把握。
3. ニーチェは「パイロイトのリヒアルト・ワグナー」を崇拜と讃辞をもって書いたが出版されて五週間も経たないうちに「私の誤ちはパイロイトに一つの理想をもって来たことであった。だから最もにがい失望を味わったわけである。」又こうもいっている。「私はワグナーをこえて高く音楽による悲劇をみていたのであり、ショーペンハウアをこえて高く生存の悲劇のうちに音楽を聞いていたのである。」
4. 「音楽と言葉は一つである」と常に主張していたベートーベンは1808年に作品86のハ長調のミサ曲と交響曲二曲（第5と第6）をブライトコッフ商会に売ることが出来た。店主のゴットフリート・クリストフ・ヘルテルと契約をし、その後3ケ年にわたってブライトコッフはベートーベンの作品を独占的に出版した。彼は前記の3曲以外に作品69のチェロソナター曲をつけて一括して900グルデンの協商貨弊の手形を受とることが出来た。  
「かく運命が戸をたたく」とベートーベン自身が説明したと弟子のシントラーによって伝えられて以来「運命」と云う劇的な標題で一般に呼ばれているが作曲者はそのことについて楽譜上では何らふれていない。第3交響曲には自筆で はつきりと「英雄」Eroica と記されてあった。又二年後に出版されたパート譜にはイタリア語で「一人の偉人の思い出を 祭るために 作曲された。」と書きそえられている。しかし第5は1828年パリでの初演の時はしばらく「皇帝交響曲」という名で呼ばれていた。
5. フォーグエル Johann Michael Vogl (1768~1840) は当時の有名なオペラ歌手であり殆ど無名のシューベルトを彼に引き合せたのは友人のショーバーであり1817年のことである。

#### 参考文献

- 『音楽』1947年7~8月合併号, アポロ出版社  
「音楽」1948年1月号, 同上  
「ミュージック」1947年5月号, 同上  
「ミュージック」1948年2月号, 同上

「フィルハーモニー」1947年3月号, 日本交響楽団  
「音楽芸術」1950年2月, 音楽の友社  
「レコード」1932年7月, 音楽世界社  
渡辺一夫『フランス文学案内』(岩波文庫)  
野村良雄『世界史の中の音楽』(新時代社, 1971年6月)  
ヴァン・ルーン, 玉城肇訳『芸術の歴史』(新評論社, 昭和30年)  
エヴラン・ルテール『フランス歌曲とドイツ歌曲』小松清訳(白水社, 文庫クセジュ)  
Sachs, Curt, *The Rise of music in the Ancient World* 柿木五郎訳(音楽の友社 1943年)  
Deutsch, Otto Erich, *Schubert*, translated by Eric Blom (London, J.M. Dent and Sons Ltd, 1946).  
アインシュタイン『シューベルト』浅井真男訳 (白水社 1973年4月)  
属 啓成『シューベルト』(音楽写真文庫IV) (音楽の友社 昭和36年3月)  
今井 宏『世界の歴史絶対君主の時代』(河出書房 昭和44年5月)  
『世界の古典名著総解説』(自由国民社 1979年2月)  
グラウト『西洋音楽史』服部幸三訳(音楽の友社 昭和53年8月)  
Harvard Concise Dictionary of music Don Michael Randel, (Cambridge, The Belknap Press of Harvard University Press, 1978).  
ベートヴェン書簡集 小松雄一訳(岩波文庫 昭和44年11月)

原稿受理 1979年6月22日

## Schubert and Romantic Music in the Romantic Movement

Hideo Yashiro

In 1978 I participated in an anniversary celebration of the 150th year of Schubert's death. 31 years earlier a similar celebration commemorated his birth. In postwar Japan, this was a rarity, and indeed even in Europe such musical gatherings as the festivals at Salzburg and Bayreuth are a postwar phenomenon. The whole-hearted commemoration of Schubert by a struggling Japan is no small indication of the responsive enthusiasm Japanese feel for Schubert.

Schubert stands in the center of the Romantic movement, born a decade after its beginnings. Like Beethoven, his emotional expression still has the forms of classicism. The mid-19th century was ripe for the heart-stirring leanings of the Romantic movement. In literature Goethe, a man Schubert idealised, and Schiller turned to nature and their inner responses for inspiration. In music Beethoven, particularly in his later years, placed more and more weight on intensity of expression.

Educated in this environment, Schubert lent his special flavor by developing the *lied*, a sensitive rendition of lyric poetry in song. Performed in small gatherings of close friends, these *lied* placed equal importance on meaning and music. As Schumann commented on hearing Schubert's last symphony written nine months before his death, "The 7th symphony demonstrates all of Schubert's greatness and fully captures the Romantic spirit: like Jean Paul's unfinished novel, it knows no end."